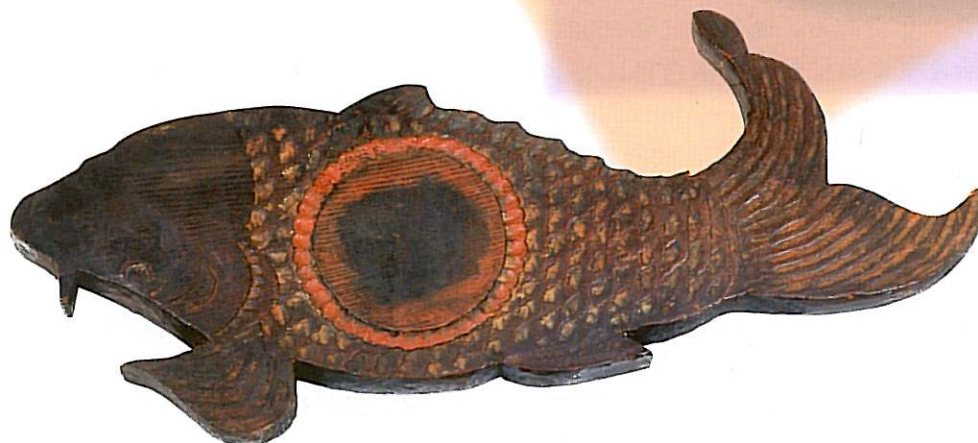


所 陵

No. 55

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



魚鐸 Fish - shaped wooden clapper board
(羽間コレクション 江戸時代後半)

● 目 次 ●

イラン技術文化史紀行 テベ・シアルクとカシャンオアシス	下間 頼一 他	2
出雲藩屋敷と尾道商人 一尾道・旧出雲藩屋敷跡を訪ねて	森本 幾子	4
一分金と小判の重量測定	吉川 潤	6
「年史資料展示室」の開設から1年をふり返って	熊 博毅	8
関西大学博物館所蔵 重要文化財 縄文鉢形土器修復	犬竹 和	10
重要文化財「縄文鉢形土器」の修復と穿孔の発見について		12
平成18年度購入資料の紹介 一日本の色絵陶磁器一		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

イラン技術文化史紀行

テペ・シアルクとカシャンオアシス

下 間 頼 一

緒 方 正 則

塩 津 宣 子

2002年12月27日、Tepe (又はMound) SialkとKāshānを訪ねる幸運に恵まれた。テペ・シアルクは新石器時代よりの遺丘が幾層にも重なる重要な遺跡である。カシャンは土漠中のオアシス都市として長い歴史を持つ。

KāshānはTeheranの南177km、土漠の緑のオアシス。人口約6万人。土埃りにまみれて乾ききった土漠の旅を続け水に潤された緑のオアシスに着くとホッと癒される。この水はカナートではなくザグロス山脈の雪解け水が伏流となり、泉として湧きだした。緑に囲まれた日干し煉瓦の民家ばかりである。断熱性に優れ50℃に近い日較差を凌ぐのに最適。南西郊に19世紀初めに作られた王の庭Fin Gardenがある。王の離宮である。泉水滾々と湧き、幾何文水路が縦横に巡り、樹林亭々。まさに水と緑の桃源郷である。薔薇水の芳香は人を幻惑する。

Tepe SialkはKāshānの南西5km、Zagros山脈東北麓の土漠にある。水に恵まれたオアシスで1930年にRoman Ghirshman等欧州考古学者により発掘された。南北の交易路の要衝として新石器時代より青銅器時代(約5000～2500BC)にかけて村落が営まれた。遺跡は1kmを隔てる南北の2丘がある。今回は南丘を訪れた。遺丘への道を登る。左手に覆いをかけ

られた日干し煉瓦積みが保存されている。頂上に立つとテペ全景が鳥瞰出来る。渺々たる土漠の右彼方にカシャンオアシス、左手に僅かな緑(麦畑か)が見える。目測10m以上の深い堅坑が掘られ幾重もの層位が認められる。層位の境に目印が付けられ、一目瞭然である。発掘調査中であろうか。しかし発掘機材はみられない。何重もの層位を眼に焼き付け、永い永い人類の歴史がここにあるという感動にとらわれた。

層位は4期に分かたれる。5000BCに始まる第1期層よりフリントの歯を着けた鎌が出土した。農耕を示している。牛や羊が飼われた。自然銅で作った錐が出土した。死者は赤色顔料を塗って屈葬された。2期より日干し煉瓦が用いられた。強い日差しから守るため覆いを掛けて保存されている。強固な煉瓦積みで4000年の時を黙して語る。2期層よりトルコ石・玉髄・ペルシャの貝など遠方交易を示す遺物が出土した。第3期に文化は飛躍的に発達した。銅の鑄造が始まり、轆轤で土器が作られ、煙道を持つ窯で焼かれた。スタンプ印章が多く出土し交易の普及を物語る。第4期はエラム期で、エラム文字碑文が出土した。多くの彩文土器が出土し、波状の水文、格子状の耕地文などが明瞭である。土器や円筒印章はメソポタミア文明との

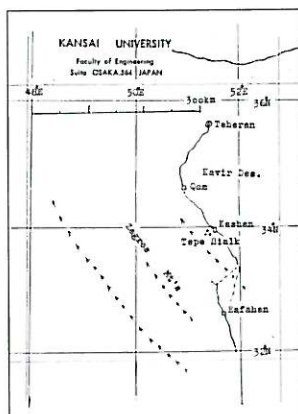


図1 Kāshān Tepe Sialk 近傍地図



図2 Zagros山脈遠望



図3 Kāshānのホテルの3階よりOasisを望む
日干煉瓦の家々(筆者撮影)



図4 Fin Gardenの幾何文水路 (筆者撮影)

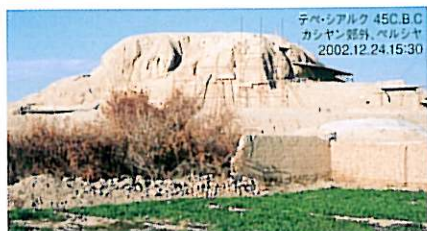


図5 Tepe Sialk、荒涼たる漠地に立ち感慨無量（筆者撮影）



図6 日干煉瓦遺跡（筆者撮影）



図7 Tepe Sialkの頂上の眺望。右手遠く Kāshān Oasis、手前豊かな耕地（筆者撮影）

交流を示す。装飾品にインダス文明やエジプト文明の影響が認められる。¹⁾

渺々たる土漠、振り返るとザグロク山麓に近い。遠く白雪の峰々が望まれる。カシヤンは水に恵まれ、緑豊かなオアシス。ここに古代文明が開花した。ザグロス山中にはルリスタンの青銅器文化が花開いた。

帰途、遺跡入り口の標識の ziggurat の CAD 図に気付いた。2002 年 Iran Cultural Heritage Organization（ペンシルバニア大学の Sahmirzadi 博士等のチーム）により復元されたジグラットの 3 次元 CAD 図である。エラム王国のジグラットは 4 基。Chogazanbil z, (1250BC 頃)、Susa z, (1800BC), Haft Teppeh z, (1375BC) と Tepe Sialk z, (1290BC) である。シアルクのジグラットは 32 番目に確認された。ひな壇型で、3 つのテラスと 2 つのスロープを持つ独特の設計である。大小 2 基の複合体ともみられる。

南丘の近くに出土陶片が層位別に整然とならべられていた。エラム期陶片には面白い文様が描かれている。古代人の生活感情がにじみ出ている。茫洋たる土漠の中、雄大な遺丘を仰ぎ、土器片の山を前にしてしばし遊心千古の想いにふけた。

謝辞 適切なご高導を頂いた飛田正美先生（加曽利貝塚博）・格別の便宜を与えられた山口卓也氏（関大博）・文献調査に多大の援助を頂いた石立弥生子氏（関大博）・図書文献を調査された奥村政博氏（関大図）に深甚なる謝意を表します。

【参考文献】

- 1) 西谷真治；水野清一・小林行雄編、図解考古学辞典 1961 東京創元社
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia
by Wikimedia Foundation 2007 U、S、A、



図8 深い豎坑



図9 整然と並べられた出土陶片、右はエラム期層出土

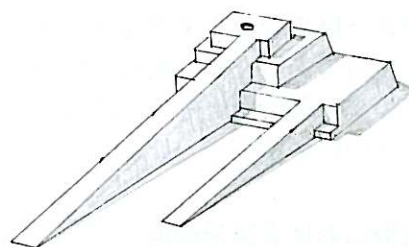


図10 ziggurat、CAD 復元図（遺跡入口の標識図より筆者描く、多少の誤差は御寛恕下さい）



図11 エラム期層出土の彩陶片（長75×幅55×厚8mm）

出雲藩屋敷と尾道商人

—尾道・旧出雲藩屋敷跡を訪ねて—

森 本 幾 子

旧出雲藩屋敷跡を訪ねて

広島県尾道市は、小高い山の名刹を縫うように連なる坂道とおだやかな瀬戸内の情緒が今なお残る港町である。千光寺という真言宗寺院が有名であるが、この寺へ通じる道は千光寺道と呼ばれている。この千光寺道を上る途中、坂の左手に古めかしい洋館があり、その傍らに小道が細長く延びている。その小道を進むと蘇鉄と竹藪が生い茂る独特の雰囲気包まれた塀が前方に現れる。時代に取り残されたようなこの塀の内が、旧出雲藩屋敷跡である。

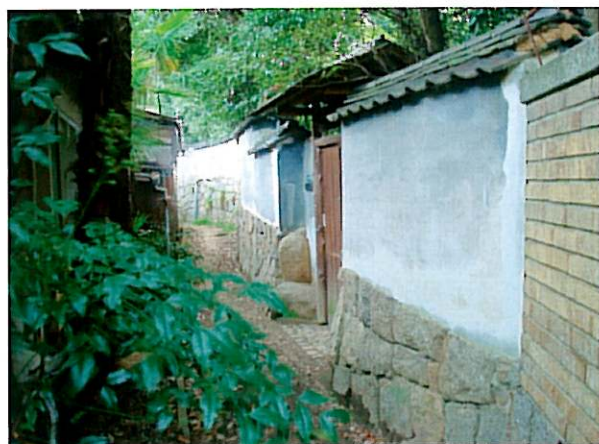
ここは、近世期、出雲藩が尾道に設けた出張所としてその歴史的役割を果たしていた。この頃、諸藩は大坂へ米穀を移出し、堂島の商人を蔵元や掛屋として米を売却させ藩財政を切盛りしていた。しかし、地域市場の発展や情報の発達が進むなかで、近世後期～幕末期には、大坂まで米を運ばずに、途中の湊で売却する藩がでてくるようになった。出雲藩も、尾道という良好の湊町で尾道の豪商に米の売却を請負わせていたのである。近世の尾道は、広島藩の主要な湊として北前船が寄港し、米穀類・肥料の干鰯・瀬戸内や九州から運ばれる綿などの交易湊として栄え、財をなした豪商が居を構える瀬戸内経済の要所であった。今回は、近世から近代にかけての出雲藩屋敷とそこに出入りしていた尾道商人について紹介したい。

出雲藩屋敷における廻米御用

～橋本家による藩米売却請負

尾道の出雲藩屋敷の主な役割は、藩米の売却であった。尾道の有力商人の橋本家は、屋号を角灰屋と称し、尾道にて金融業を営んでいた家であり、同家吉兵衛は、嘉永期に出雲藩から「雲州廻米問屋」に仰せ付けられた。嘉永6年(1853)に出雲藩から藩の御手船で尾道まで運ばれた米は、1,455俵(596石余)〈2月〉・2,000俵(820石)〈3月〉・1,455俵(582石余)〈5月〉・6,900俵(2,760石余)〈6月〉・3,500俵(1,344石)

〈7月〉・627俵(245石)〈8月〉であり、橋本吉兵衛がこれを請け負っている(「雲州御米算用帳」広島県立文書館所蔵橋本家文書No.860)。米の値段やその売却については出雲藩屋敷において、藩の役人と橋本家をはじめとする他の尾道商人との間で相談して決定していたのであろう。出雲藩屋敷は、出雲藩財政にとって欠かせない出張所となっていたのである。



旧出雲藩屋敷跡(尾道市・東土堂町)

出雲藩士の食事～大紺屋による料理仕出し

出雲藩士は、藩米の売却や隣国の福山藩の主要湊である鞆浦へのお出張の際には、出雲藩屋敷にて生活しなければならなかった。これら藩士の朝昼夕の料理仕出しについては、尾道商人・大紺屋佐兵衛が担当していた。大紺屋もかつては出雲藩の廻米御用を請け負っていた商人である。幕末期と推定される大紺屋の記録には、出雲藩屋敷において藩士が食べていた料理献立が記載されているので、その一例をみてみよう。

初夏の4月には、贅沢なことに朝昼夕を通してすべて鰯が登場し、その他季節の物も見られる。夕食には、穴子が竹の子とともに姿を見せられている。11月には、錦大根や細魚・菊菜など旬の食材が食卓に並び、夕飯には蠣鍋が出されて、藩士たちは冷えた身体をあたためられたことだろう。4月の鰯刺身や11月の細魚糸作りを食べる時には、千代口(「ちょこ」と読み、

器である「猪口」の意で、またその器に入れた料理のことをも指す)溜りや千代口代々(橙)酢などが添えられている。その他に酒などもふるまわれ、出雲藩屋敷に出張している藩士たちは、瀬戸内の旬の食材がふんだんに盛り込まれた料理を堪能することができたものと思われる。

出雲藩屋敷における献立(一例)

年月日	朝	昼	夕
子4月9日	皿(鯛焼物)汁(みそ・くずし・青ミ)平皿(花かつうを・豆腐・のり・かやく)	向(生盛鯛平作り・めうが・目しそふ)汁(五とふ味噌・鯛の子・青ミ)菓子椀(椎茸・花こち・うと)	鉢(うと・鯛刺身・三ツ葉・千代口たまり・わさび)井(あなこ・竹の子)井(えんとふ)井(漬もの)
子11月9日	煮染かつうを煮・ひじき・香の物	向(海老いり出し)汁(みそ・くずし・青ミ)・漬もの	鉢(錦大こん・さより糸作り・菊菜・千代口代々酢)鍋(蠣・豆腐)煮染こんにゃく・かす漬

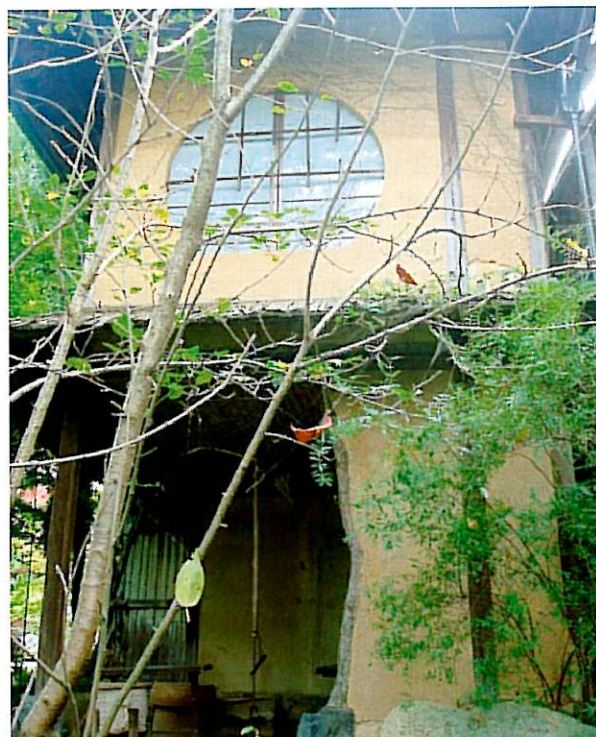
(「毎日献立」広島県立文書館所蔵橋本家文書No934より)

明治以降の旧出雲藩屋敷～島居家による買取

やがて明治へ時代が移り、出雲藩屋敷も藩の出張所としての役割を終えることとなる。明治初期の公開入札により、旧出雲藩屋敷は、当時尾道で薬種問屋を営んでいた島居家^{しまぐい}が別荘地として買取ることとなった。現在のご当主・島居勝氏のお話によると、この辺り一帯は、もともと寺と出雲藩屋敷のみで、民家が建てられるようになったのは明治期になってからということである。特に別荘地として人気が高かったらしい。明治以後、旧出雲藩屋敷は、尾道の豪商が取引先を接待する場所として使われていたという。

また、出雲藩屋敷にも敷内流の茶室が残されていたが、明治後期に島居家は、旧出雲藩屋敷跡地の一面に風流な二階建ての茶室「帆雨亭」を建てている。この茶室は一階が腰掛け式の茶室で、天井には、中国から輸入した薬種が入っ

ていたという行李がそのまま利用されるなど、おもしろい趣向が凝らされている。二階は、庭に咲く桜や季節の草花を眺めながら休憩ができる座敷となっており、小高い山の中腹にあるので、尾道水道を行きかう大小の船々を望遠することができたであろう。



茶室・帆雨亭(尾道市・東土堂町)



帆雨亭天井

*明治以後の旧出雲藩屋敷については、尾道市を訪れた時、現在のご当主・島居勝氏にご教示を得ました。また、旧出雲藩屋敷および帆雨亭の写真については、島居氏のご厚意により掲載させていただきました。急な来訪にもかかわらず、ご親切に説明をしてくださった島居氏に心から感謝の意を申し上げます。

一分金と小判の重量測定

吉 川 潤

2007年4月8日から5月20日にかけて、関西大学博物館では、平成19年度企画展「小判とおかね～近世から近代の金銀貨幣～」が開催された（写真1）。近世の小判や丁銀から、二十円金貨や一円銀貨を始めとする近代の金銀貨、甲号兌換銀行券などの紙幣、世界各国の硬貨まで、多くの貨幣が展示されて好評を博した。ところで、今回の展示が終了した後、筆者は展示されていた貨幣の内、一分金と小判について、ある調査を行う機会に恵まれた。展示中から興味を持っていた点であるが、一分金と小判の重量についての調査である。

近世の貨幣については、江戸を中心とする東国では金貨が流通し、大坂を中心とする西国では銀貨が使われていたことがよく知られている。この内、丁銀や豆板銀といった銀貨は、ひとつひとつの量目（重量）が異なる秤量貨幣であり、量目に合わせて貨幣としての価値も異なるため、秤で重さを測ってから使われた。今回、展示された豆板銀をみると、同じ種類の豆板銀でも大きさや形が大きく異なっており、ひとつひとつの重量が異なっていたことが実感できる（写真2）。一方、一分金や小判などの金貨については、計数貨幣であり、ひとつひとつの量目や貨幣としての価値は一定であるとされている。同じ種類の一分金同士、小判同士であれば重量は等しく、価値も同じになるよう造られている訳である。また、一分金と小判の重量については、従来の研究からは、ひとつの法則がみられることが指摘されている（『図録 日本の貨幣 2』）。一分金1枚（1分）の価値は、小判1枚（1両）の四分の一であるが（1両＝4分）、一分金は量目（重量）も小判1枚の四分の一になるように造られているという点である。従って、小判1枚と一分金4枚の重さが等しいことになる。なお、これまでの研究では、この法則は、徳川家康がいまだ関東に領国を持つ一戦国大名に過ぎなかった頃、その領国で発行した武蔵墨書小判と額一分金という貨幣の間にもみら

れ、それが近世の小判や一分金に引き継がれたものであると指摘されている。すなわち、一分金は同じ種類のものであれば、1枚の重量が同じになるように造られており、それは小判1枚の重量の四分の一になるという訳である。今回の展示でも、多くの一分金が展示されたが、筆者はそれらの重量を測定し、この法則を実際に自分の目でみてみたいと思っていたのである。

実際に重量を測定した結果が、表1と表2である。表1は一分金についての結果だが、今回展示された一分金の内、慶長一分金（10枚）、元文一分金（11枚）、文政一分金（5枚）、天保一分金（3枚）、安政一分金（1枚）、万延一分金（1枚）の計31枚について重量の測定を行った。それぞれの重量をみると、慶長一分金10枚の重量は4.40～4.45gの間であり、その差は0.05g、次に元文一分金は3.25～3.28gで差は0.03g、文政一分金は3.24～3.29gで差は0.05g、天保一分金は2.80～2.82gで差は0.02g、安政一分金は2.24g、万延一分金は0.83gとなっていることがわかる。1枚ずつしかない安政一分金と万延一分金を除くと、同じ種類の一分金の重量はほとんど等しく、その差は最大でも0.05gしか認められないことが確認できる。

また、今回展示された小判の内、表1の一分金に対応する時代のものを挙げると、元文小判6枚、文政小判9枚、天保小判8枚、万延小判2枚の25枚になるが、その重量をまとめたのが表2である。一分金と同様にその重量をみると、元文小判の重量は13.04～13.12gの間であり、その差は0.08g、文政小判は13.08～13.15gで差は0.07g、天保小判は11.20～11.27gで0.07g、万延小判は3.32～3.33gで0.01gとなった。小判の場合、重量の差は一分金より少し大きいですが、それでも最大で0.08g以内となることが判明した。

なお、表1と表2には、それぞれの一分金と小判について重量の平均値を記しているが、元文～万延一分金の平均値を四倍してみると、次

のようになる（〔 〕内の数値は表2における各小判の重量の平均値）。元文一分金：13.04g〔13.07g〕 文政一分金：13.04g〔13.11g〕 天保一分金：11.20g〔11.23g〕 万延一分金：3.32g〔3.32g〕である。どの一分金も重量の平均値を四倍した場合、各小判の重量の平均値とほとんど等しく、その間で生じる差は0～0.07gの内におさまった。

以上のように、今回展示された一分金と小判の重量を測定すると、同じ種類のものの間で生じる重量の差は、一分金では最大でも0.05g、小判では0.08g以内であり、極めて一定の重量になるように造られていることが確認できた。また、一分金の重量を四倍すると小判1枚の重量に等しくなる点についても、平均値で計算した場合、生じる差は0～0.07gと極めて小さいことが確かめられたのである。

表1：一分金重量一覧

種 類		分類記号	重量(単位はg)
慶長一分金	Na1	橙6	4.44
慶長一分金	Na2	橙7	4.41
慶長一分金	Na3	橙8	4.42
慶長一分金	Na4	橙9-1	4.40
慶長一分金	Na5	橙9-2	4.43
慶長一分金	Na6	橙9-3	4.42
慶長一分金	Na7	橙9-4	4.42
慶長一分金	Na8	橙9-5	4.44
慶長一分金	Na9	橙9-6	4.42
慶長一分金	Na10	橙9-7	4.45
(4.40～4.45g) 重量の差：0.05g 平均：4.42g			
元文一分金	Na1	橙14-1	3.27
元文一分金	Na2	橙14-2	3.25
元文一分金	Na3	橙14-3	3.27
元文一分金	Na4	橙14-4	3.26
元文一分金	Na5	橙14-5	3.28
元文一分金	Na6	橙14-6	3.26
元文一分金	Na7	橙14-7	3.26
元文一分金	Na8	橙14-8	3.26
元文一分金	Na9	橙14-9	3.27
元文一分金	Na10	橙14-10	3.27
元文一分金	Na11	橙14-11	3.27
(3.25～3.28g) 重量の差：0.03g 平均：3.26g			
文政一分金	Na1	橙15-1	3.26
文政一分金	Na2	橙15-2	3.29
文政一分金	Na3	橙15-3	3.24
文政一分金	Na4	橙15-4	3.26
文政一分金	Na5	橙15-5	3.29
(3.24～3.29g) 重量の差：0.05g 平均：3.26g			
天保一分金	Na1	橙17-1	2.80
天保一分金	Na2	橙17-2	2.82
天保一分金	Na3	橙17-3	2.80
(2.80～2.82g) 重量の差：0.02g 平均：2.80g			
安政一分金	Na1	橙18	2.24
			平均：2.24g
万延一分金	Na1	橙19	0.83
			平均：0.83g

() 内の数値は、重量の最小および最大値。平均値は小数三位以下、切捨。



写真1

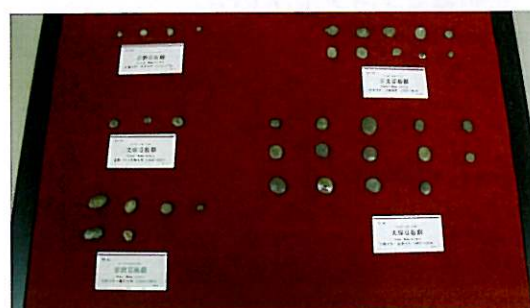


写真2

表2：小判重量一覧

種 類		分類記号	重量(単位はg)
元文小判	Na1	黄2	13.04
元文小判	Na2	黄3	13.04
元文小判	Na3	黄4	13.07
元文小判	Na4	黄5	13.07
元文小判	Na5	黄6	13.08
元文小判	Na6	黄7	13.12
(13.04～13.12g) 重量の差：0.08g 平均：13.07g			
文政小判	Na1	黄8	13.08
文政小判	Na2	黄9	13.08
文政小判	Na3	黄10	13.12
文政小判	Na4	黄11	13.15
文政小判	Na5	黄12	13.12
文政小判	Na6	黄13	13.11
文政小判	Na7	黄14	13.13
文政小判	Na8	黄15	13.12
文政小判	Na9	黄16	13.14
(13.08～13.15g) 重量の差：0.07g 平均：13.11g			
天保小判	Na1	黄17	11.25
天保小判	Na2	黄18	11.22
天保小判	Na3	黄19	11.27
天保小判	Na4	黄20	11.22
天保小判	Na5	黄21	11.23
天保小判	Na6	黄22	11.27
天保小判	Na7	黄23	11.20
天保小判	Na8	黄24	11.25
(11.20～11.27g) 重量の差：0.07g 平均：11.23g			
万延小判	Na1	黄25	3.33
万延小判	Na2	黄26	3.32
(3.32～3.33g) 重量の差：0.01g 平均：3.32g			

() 内の数値は、重量の最小および最大値。平均値は小数三位以下、切捨。

【参考文献】

- ・土屋喬雄・山口和雄監修 日本銀行調査局編 『図録 日本の貨幣 2 近世幣制の成立』 (東洋経済新報社 1973)
- ・三上隆三 『円の誕生 近代貨幣制度の成立 増補版』 (東洋経済新報社 1989)

「年史資料展示室」の開設から 1年をふり返って

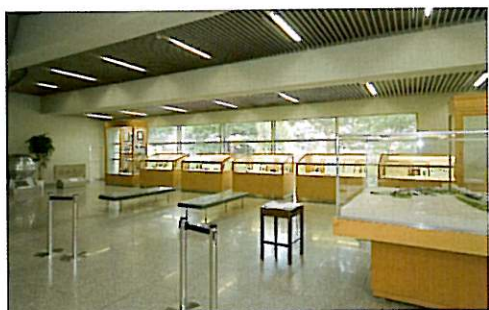
熊 博 毅

平成18年10月15日、関西大学簡文館の1階に「年史資料展示室」がオープンしてから早くも1年が過ぎようとしている。

明治19年11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺というお寺で誕生した、関西大学の前身である関西法律学校の開校から数えて、平成18年は2度目の還暦、すなわち創立120周年という佳節にあたった。120年の歴史を有する大学としては、みずからの越し方をさまざまな資料や解説で理解してもらおう展示室はぜひとも必要である、というのが「年史資料展示室」設置の理由であるが、そこに至るまでの経過は簡単なものではなかった。まずは「年史資料展示室」開設までのあゆみをふり返ってみよう。

「新関西大学会館」のロビーで資料展示

簡文館のなかに専用の展示室ができるまで、大学史の資料は新関西大学会館のロビーで展示していた。平成8年に関西大学の新しい顔として正門の左右に新関西大学会館が完成し、翌9年2月から展示ケース6台を使用して年史資料を展示したのが、その始まりである。



新関西大学会館での資料展示

以後、南棟1階のインフォメーションロビーで常設的に展示を行うようになったが、平成18年に簡文館へ移動するまでの9年あまりの間には「関西大学創設期展」「関西大学史展」「関西大学墨跡展」「関西大学経済学部・商学部創設100年記念展示」といった企画展示も行っている。

東西学術研究所跡を年史資料展示室に

平成18年4月、それまで東西学術研究所、

経済・政治研究所、法学研究所の3つに分かれていた人文・社会科学系研究所の事務室が1つにまとまり、研究所事務室として再編されることに伴い、簡文館のなかにあった東西学術研究所事務室が見島惟謙館へ移転することになった。学内の事務組織が大きく移動する時期でもあったため、その跡地は、しばらくの間、空きスペースとなっていたが、東西学術研究所の隣で年史編纂室が資料の収集・整理・保存や『120年史』の編纂作業を進めていたこともあり、最終的に年史編纂室が利用することになった。

そこで年史編纂室では、学内の5カ所に分散保管していた年史資料や図書を一括保管するため、6月に移転作業を行い、同時に旧東西学術研究所事務室と所長室の2室を展示室にするべく学校法人と交渉を行い、7月下旬にその了解を得ることができた。

ちょうどそのころ、年史編纂室では、創立120周年記念事業の一環として『関西大学120年史』と『関西大学120年のあゆみ』（写真集）の編纂に忙殺されていた。特に、『関西大学120年のあゆみ』（写真集）は、記念式典ならびに記念校友総会での記念品の1つとされるため、10月15日までの完成をめざして編纂作業が大詰めを迎えていた。そういうさなかに展示室の開設が新たな業務として付け加わったのである。

そして120周年の佳節に開設する年史資料展示室も、創立120周年記念校友総会が開かれる10月15日にオープンすることが決定したため、『120年史』『120年のあゆみ』（写真集）、展示室の三者が同時に進行する事態となった。残された時間は2ヵ月もなく、夏季休業をはさんで、展示室の開設準備は時間との競争になった。

開設準備

8月3日に専門の業者2社から展示室のデザイン案についてプレゼンテーションを受けたのち、業者選定の学内手続きを終え、決定した会社と具体的な作業を始めたのは9月に入ってからのことであった。

研究所の所長室や事務室として使われていた部屋を展示室にすることから、電気関係や壁回りなど、全面的な改修工事が必要であった。そうした工事と並行して展示のプランも進められた。



改修工事が進む常設展示室

「年史資料展示室」は、常設展示室と企画展示室の2室から成っている。

常設展示室では、創立期から現在までを5つの時代に分け、それまで使用していた展示ケースを時代区分ごとに充当させた。そして展示ケースのうえに、それぞれの時代の概要をまとめた解説と写真を掲載したパネルを展示し、来室者に理解してもらうようにした。

一方、企画展示室は写真パネルを四方に取りつけた展示フレームを部屋の中央に据え、周囲に縦型の大型展示ケースと、他大学が刊行した年史図書を並べた書架を配置するレイアウトにした。建学の精神に立ち帰るという趣旨からオープニングのときの企画展示テーマは「創立の時代に想いをはせて」とした。



写真の展示フレームを中央に据えた企画展示室

オープン後のあゆみ

平成18年10月15日の記念校友総会当日、年史資料展示室には卒業生や大学関係者あわせて405人が訪れた。母校の歴史を分かりやすく理解できる年史資料展示室が完成したことに対する賞賛の声も多数頂戴した。

「年史資料展示室」の開設を計画した当初、コンセプトの柱としたのは、簡文館のなかにある博物館と相まって関西大学の文化ゾーンを形成するということであった。そのため、あらゆる

る機会を利用して見学のPRを行い、平成19年4月からは学内の教育職員に対しても新入生やゼミ生への導入教育の一環として博物館と年史資料展示室を見学してもらいたいと呼びかけたのである。その結果、夏休みまでの4ヵ月で約4100人が年史資料展示室の見学に訪れた。

簡文館が登録有形文化財に登録

関西大学では、かねてから博物館を中心に、簡文館を国の登録有形文化財としてもらうべく文化庁に申請していた。審議の結果、平成19年3月に登録有形文化財として登録されることになった。関西大学の建築物としては初めての登録である。

簡文館は昭和3年に大学図書館として建設され、さらに昭和30年に大幅な増築工事を受けた。このとき、増築建物の設計を担当したのは昭和42年に文化勲章を受けた村野藤吾氏である。簡文館が登録有形文化財として登録された理由としては、昭和初期に建てられた大学図書館の特徴を今によく伝えていることと、村野作品の1つであることなどが挙げられている。

年史資料展示室では、簡文館が登録有形文化財となったことを記念して、平成19年4月から「簡文館ものがたり」という企画展をスタートさせた。この展示は、都市環境工学部（建築学科）の学生などをはじめとして、各方面から好評を得ている。

展示室の今後

現在、大学には従来の教育・研究ということに加えて社会貢献ということが強く求められている。この視点に立てば、年史資料展示室が対象とする人びとは、在学生や教職員だけでなく、卒業生や在学生の父母、地域の人びとや大学にやってくる高校生など、多岐に及ぶようになる。

簡文館にある博物館は「開かれた大学」を地域に具現化する存在の1つであるし、年史資料展示室もまた同じ性格を有している。

多彩な人びとを迎え入れることで、関西大学の過去・現在・未来の座標軸のなかから、関西大学の行く末を考えてもらう場の1つに年史資料展示室はなるべきであろう。今後どのような展示を行うべきか、という問いに対する答えも、そうした視点から自ずと導き出されてくるかもしれない。オープンから1年が経過しようとする今、あらためてその気持ちを強くしている。

関西大学博物館所蔵 重要文化財 縄文鉢形土器修復

犬 竹 和

はじめに

関西大学博物館所蔵の重要文化財縄文鉢形土器は、大正7年に大阪府藤井寺市国府遺跡第4次調査において玦状耳飾を伴う人骨の胸の上から出土した。その出土状況から、この土器が遺体とともに埋められたものと考えられ、縄文時代の埋葬を研究する上で稀少かつ貴重な資料であることが指摘されている。十数片に割れた状態で出土した縄文鉢形土器は以前に復元されているが、数十年にわたる経年変化によって修復材料の劣化がみられ、再修復を要する状態であった。そこで、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所の平成18年度の受託研究として再修復が行なわれた。

修復材料の開発

文化財は光・温度湿度・空気などによって少しずつ劣化する。同時に文化財修復に使用された修復材料も日々劣化している。通常、接着剤などの修復材料の方が土器本体よりも速く劣化

するので定期的に再修復を要する。この土器の場合は使用された石膏が大正あるいは昭和期のものではあるが、現在に至っては亀裂や粉状化などの劣化がみられる。接着剤は黒く変色し、液垂れの跡が表面に残っている状態である（写真1）。接着力が衰えているのでいつ破片がはずれてもおかしくなく、土器の取り扱いを困難にしていた。現在の文化財修復はその時々において最も適切な技術や修復材料を選定して行われている。土器修復においては欠失部の充填材料として現在使用されている石膏やエポキシ樹脂は、質感・色合い・強度や耐候性などの点において問題があり、充填材料の開発が必要であった。今回の修復では、これらの問題点を踏まえ近年研究開発した欠失部の充填材料（以下補修用擬土）に更に改良を加えて使用した。

土器の修復

①解体、クリーニング

まず劣化した石膏は超音波メスを使用して除



写真1 修復前



写真2 修復後

去した。底部の中央の欠失部に関しては、修復前の調査検討において、単なる欠失部ではなく埋葬時に故意に穿孔されたものではないかと考えられるようになった。実際、底部の石膏を除去した結果、破断面はいずれも古く、外側から内側に広がっており、外側から内側に向かって力が加えられたと推定することが出来た。従って意図的に穿たれたものと考え、この欠失部は補修用擬土を充填せず、そのまま穴の状態で保存することになった。この底部穿孔は今回の修復で新たに確認された重要な発見である。使用されていた接合部の接着剤は有機溶剤（アセトン）で溶かして土器を解体した（写真3）。

②土器の強化処理と破片の接合

土器の破断面を強化するため及び接合時の破断面への接着剤や補修用擬土の浸透を防ぐために、破断面にアクリル樹脂（パラロイドB72）を塗布した。また脆弱になっている表面にも溶剤を変えたアクリル樹脂（エチルアルコール7.5に対して蒸留水2.5の割合で混ぜた溶液を使用）を塗布し、樹脂光沢や色の変化を防いで表面を強化した。破片の再接合もアクリル樹脂の濃度を濃くして接着剤として使用した。

③補修用擬土充填

補修用擬土に使用した樹脂は加熱硬化型アクリル樹脂エマルジョン（プライマルE-357）である。この樹脂に以下の材料を混合すると粘土状の充填材料になる。材料は、800℃で焼成した土または焼かれた土（新たに焼かれた土器を砕いたもの）、収縮を防止するためにガラスマイクロバルーン、重量を軽くし液体（樹脂）の含みをよくするための珪藻土、乾燥後の亀裂を防止し補修用擬土を強化するための炭素繊維、微妙な色を再現し補彩工程を省くための顔料である（写真4）。この補修用擬土は個々の土器に応じて色を調整することができる。今回は外側と内側で色が異なるので二色の補修用擬土を使用した（写真5）。

④整形と樹脂硬化

この補修用擬土は可塑性があり成形が容易である。したがって室温である程度乾燥させた後にサンダーや紙鑢・鑢・メスを使用して表面を



写真3 解体、クリーニング後

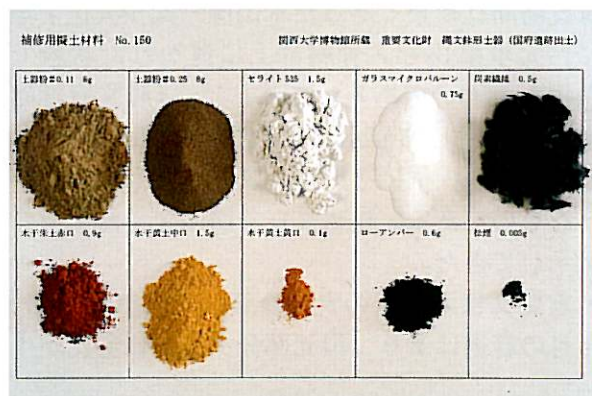


写真4 補修用擬土材料



写真5 欠失部に補修用擬土を充填

整え、土器胴部上半の爪形文、下半の羽状縄文も復元した。整形後55℃の恒温槽に一日程入れ硬化させた。

おわりに

樹脂を硬化させた後も表面の風合いや色合いなど土器そのものが持つ質感に近く、石膏やエポキシ樹脂で復元された土器と比較すると、自然で全体に調和のとれた仕上がりになった（写真2）。

重要文化財「縄文鉢形土器」の修復と 穿孔の発見について

縄文鉢形土器の修復と穿孔の発見

関西大学博物館の国府遺跡資料は、鉢形土器、玦状耳飾6点、丸玉1点、高坏形土器、笊形土器、銅鏃5点の、合計15点が重要文化財に指定されている。このうち鉢形土器は、大阪毎日新聞社社長であった本山彦一氏が大正7年に、大串第18号人骨胸部上に置かれた状態で発掘したものである。これらは、『農業博物館 本山考古室』に展示された後、昭和30年代はじめに関西大学にその他の資料とともに移管されたものである。以来長らく関西大学博物館で展示してきた。

重要文化財指定の貴重な資料でありながら、年月の経過により、復元部分や接着に劣化が生



昭和10年の鉢形土器



石膏でふさがれた穿孔

じていたので、文化庁と東京文化財研究所、関西大学博物館の三者で協議の上、関西大学と東京文化財研究所が「関西大学博物館所蔵 重要文化財 縄文鉢形土器の復元修復」の調査研究の委託契約を締結し、平成18年度に修復を行った。修復の際に詳細な観察を行った結果、鉢形土器の底部に人為的な穿孔が確認された。

穿孔部分は、発掘時に認識されずに石膏で埋められて復元されていたが、この石膏を取り去ったところ、底部から内面に向けて一撃で楕円形に穿孔された痕跡が確認された。

屈葬人骨と鉢形土器

国府遺跡からは、縄文時代の埋葬が多数発掘された。このうち、大串第18号人骨は、ほぼ全身の骨格が残った仰臥屈葬（仰向きの姿勢で、小さく手足を折りたたむ）で、頭部を東南東に向けている。人骨は、現在大阪大学に保管されている。性別は成人男性の可能性が高いとされている（池田次郎 1988「河内・国府遺跡の人骨」『橿原考古学研究所論集』第10号）。

発掘時の写真を見ると、頭部に縄文土器破片10数片を被せる（甕被葬）。玦状耳飾は、右耳を原位置、左耳を二次移動の可能性のある位置で検出する。遺体の胸上には、今回修復した鉢形土器を、横倒した状態で乗せる。土器は、発掘時には破損状態であったものを、復元して完



国府遺跡 大串第18号人骨

形にしてから写真撮影したことが、大阪毎日新聞大正7年8月17日、岩井擁南「河内国府第四回発掘調査(九)A地域の人骨」に記載されている。厳密な土器の姿勢は確認できないが、出土時の状況から横倒しだったことがわかる。いわば、鉢形土器を「のせる」、または「抱いた」状態といえる。

胸部左に長幅20数cm程、厚5～7cmほどの花崗岩自然石があり、石を抱く「抱石葬」が、埋葬遺体の腐敗により位置関係が動いている可能性がある。胸部に石と鉢形土器の両方が置かれた状態となっていたのであり、「抱石葬」という個別定義では十分に説明できない。「抱鉢・抱石葬」と呼称すべき状態である。発掘時の写真をみると、人骨周辺がくぼんでおり、おそらく墓穴があったと思われる。

第18号人骨は、耳飾りをつけ、土器片で頭部を覆い、石を抱き、さらに土器を「のせる」「抱かせる」など、国府遺跡の縄文時代前期の埋葬の中では、複雑な埋葬を行った事例であり、このような驚い葬例は、縄文時代前期の日本各地に類例を求められない。この鉢形土器に穿孔があることがわかったことは、今回の修理の思いがけない成果であった。

穿孔のある縄文鉢形土器と埋葬習俗

大串第18号人骨とこの鉢形土器は、埋葬者に対する複雑な「副葬」や「供献」の行為が、まさに「埋葬人骨の胸の上で、考古学的事実として確認」できた例である。鉢形土器の穿孔は、土器を破壊しないように丁寧に行われていることから、埋葬時に実用品の機能を喪失させてから供えたと考えられる。このことは「土器の底を穿つ」行為が縄文時代前期後半までさかのぼること、それが埋葬に関わる行為であったことを明らかにした。

日本で土器に穿孔された例は、縄文時代中期に中部高地周辺から東日本に広がった埋葬にみられる。これらは「えな壺」や幼児埋葬と考えられており、同様に埋葬にかかわるものではあるが、先行する前期の事例である成人遺体に添えられた本例とは、異なった精神的、習俗的背景を考える必要があるかもしれない。

今後、国府遺跡の鉢形土器の土器底部穿孔や埋葬法、日本列島の縄文時代の埋葬や甕棺墓、



修復検討会



穿孔された底部

逆位底部穿孔埋葬、さらには古墳出現期の底部穿孔壺のような類似例の背景にある精神世界、埋葬習俗の出自と系譜について、広く東アジア全体を視野に入れて研究していく必要がある。

発掘以来89年たって、重要文化財の修復を契機として新しい発見があったことは、文化財を保存し伝えていくことの重要性を示している。今回、東京文化財研究所により、長期の展示と保管に堪える修復が行われ、関西大学博物館で公開できることは、大変喜ばしいことである。今回の修復を行うにあたって、御指導、ご助力、ご配慮を頂いた文化庁、大阪府教育委員会、実際の作業にあたった東京文化財研究所の保存修復科学センター修復材料研究室、文化財修復師の方々に、厚く感謝したい。

この修復した重要文化財指定、縄文鉢形土器は、関西大学博物館第1展示室で一般にも展示公開している。今後、展示を続けて、学術研究と情報公開推進の一助としていきたい。

平成18年度購入資料の紹介

—日本の色絵磁器—

平成13年度から継続して東洋陶磁器を蒐集している。漢代から明・清代の中国陶磁器15点、朝鮮陶磁器6点に続いて、平成18年度は日本の色絵磁器8点を購入した。中国、朝鮮、日本陶磁器の系統的収集の一環であり、東アジアの陶芸の流れを理解するための基本資料である。

中国では12世紀に華北の磁州窯で五彩（色絵）が開発された。日本では、これを赤染付や赤絵、錦手、色絵などといいあらわしている。金（南宋）時代13世紀頃には、見込みに草花や水禽、魚などを上絵具で表した碗類が生産されており、日本では「宋赤絵」の俗名で知られる。

元代には、華南の景德鎮窯でも白磁胎の上に上絵付する色絵磁器が生産される。色絵磁器は、明代後期の正徳から万暦年間（1506～1619）には染付と入れ替わって主流となり、景德鎮などの民窯で大量生産が行われるようになった。このころ色絵が染付とともに日本に大量に輸入されて普及したことが、各地の伝世品や発掘資料などで明らかになっている。

中国周辺では、染付と色絵の磁器生産が、15世紀前半にベトナムで作られ始めている。続いて朝鮮半島で染付磁器の生産が始まるが、五彩などの生産は行われなかった。

秀吉の朝鮮出兵が連れ帰った技術者により、17世紀初頭に日本でも染付磁器が生産され、すぐに色絵磁器の生産が始まる。江戸時代には、有田を中心として日本各地で磁器の生産が始まり、国内の需要を満たした。さらに有田焼の積出港である伊万里港からは、色絵磁器が染付磁器とともに高級な品物として、広く海外にも輸出される。

オランダ東インド会社の注文により、中国陶磁様式を模倣した染付や色絵磁器が量産されたことは、それ以後の日本の磁器の器種構成や様式に大きな影響を与えることになった。

柿右衛門様式色絵水注（高：14.2cm 径：7.8cm）
首部が細長く繊細で、やや太い取手を持つ純



柿右衛門様式色絵水注



伊万里錦手鉢



白白磁素地の水差しである。胴部に簡略化された蛸唐草文帯により区切られた三つの大きな窓を配し、余白を大きくとって花文を描く。画題に柿右衛門様式の特徴を備えるが、本来は牡丹であったと思われる花文がかなり簡略化されて描かれていることから、江戸時代でも後半のものであろう。

伊万里錦手鉢（高：7.9cm 径：21.3cm）

元禄期以降、伊万里焼は上絵付の色絵ではなく、色絵に染付も加わった染錦手（金襴手）が主流となる。色絵具に金彩（金泥と金箔の文様）が施されること、染付を地紋に使うこと、器面を覆うように施文することなど特徴がある。この鉢も、金彩と赤絵、染付を駆使し、内面中央に山水画を主文様にして、その周囲に八つの区画でパルメット風の花弁や雲文、唐草を配しており、赤と緑、藍のコントラストが鮮やかである。裏面は、赤と白の椿や様式化した牡丹などを六つの区画に配している。両面とも壮麗な装飾で飾られており、器底には「富貴長春」とある。



伊万里錦手大皿



伊万里錦手大皿（高：8.2cm 径：49.8cm）

内面三つの巴形の窓それぞれに、雌雄の雉や白梅、牡丹、果実などを描き、あいだを赤と白の牡丹と金泥のパルメット風の草花や幾何学文で埋める染錦手（金襴手）の大皿である。外面には、赤と白の椿を配している。海外輸出により興隆した伊万里焼は、元禄期以降の国内需要の高まりも重なって、この大皿のような大作で絢爛な色絵磁器が出現する。それらは輸出されるとともに富裕化した町人や富農にもてはやされて量産され、元禄から明治前半まで様式化して生産が続いた。

九谷様式色絵皿（5枚組木箱入 高：2.9cm 径13.2cm）

中央に黄菊を主題に描いた小皿で、素地がやや黄色みを帯びており、器形がやや厚くてひずみも大きい。主題の周りの余白が大きく、表現も簡略化されているが、九谷様式の色絵皿である。購入資料は5枚ある組皿で、木箱に収めて収納されて大事に使用されていた。九谷焼は、伊万里焼と異なり国内に主に流通した。その窯元の位置と系譜については現在も議論がある。



九谷様式色絵皿

◆ 博物館だより

◇平成19年度春季企画展「小判とおかね—近世から近代の金銀貨幣—」を4月8日から5月21日まで開催しました。期間中、4,075名の入場者があり、盛況のうちに終了できましたことを厚く御礼申し上げます。本展は、関西大学の教育と研究に格別のご理解を示された篤志家から、江戸・明治期の金貨・銀貨や古紙幣、海外コインなど珍しい貨幣一式の寄託をうけ、特別に公開したもので、慶長丁銀や正徳小判など貴重な貨幣の数かずが来館者の注目を集めました。また、本学文化会「落語大学」部員有志による展示会場での落語上演（4月8日・28日、5月12日・19日・20日）や、前造幣博物館館長・塩川幸男氏をお招きした特別講演会「おかねの歴史」の開催（5月12日）など、展示にまつわるイベントも実施しました。特別講演会では、造幣局が所蔵する珍しい貨幣を見せていただくこともでき、89名の聴講者が、塩川先生のユーモアあふれるお話に聞き入りました。



◇平成19年度ミュージアム講座の開催

7月4日（水）から毎水曜日に3回「関西大学ミュージアム講座」を開催しました。総合テーマを「なにわの文化遺産（二）」として、のべ184名の受講者がありました。

7月4日「四季おりおり 大阪の祭り」 関西大学文学部教授 黒田 一充

7月11日「なにわの町人学者・木村兼葭堂」 京都橘大学文学部准教授 有坂 道子

7月18日「浮世絵に見る大坂の歌舞伎」 阪急学園池田文庫研究員 北川 博子

◇平成19年度博物館なんでも相談会の実施

平成18年度から博物館を会場に体験を重視したイベントを盛り込んで「なんでも相談会」を実施しています。平成19年度は、8月3日（金）と4日（土）の2日間に、「キャンパス昆虫探検隊」「作ってみよう！葉っぱのバッタ」「石とにらめっこ」「さわってみよう・博物館」「銅鐸スケッチ」など、主に小学生を対象とした行事に取り組み、2日間で439人の参加がありました。「いろいろ相談会」は4組の方から相談がありました。



・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・



『阡陵』第55号をお届けいたします。平成19年3月に簡文館が文化庁から「登録有形文化財（建造物）」に登録されました。昭和29年、当時図書館であった簡文館3階に、故末永雅雄先生が博物館の前身である考古学資料室を開設され、その後、学内の別の場所に移設された時期があったものの、平成6年からは博物館相当施設として一般公開を続けてきました。資料を大切に取り扱い、収集・保管し、教育や研究のために利用するという博物館としての役割を、関西大学で現存する最も古い建物「簡文館」において実現することに深い縁を感じます。

今号は、下間頼一氏（名誉教授）、犬竹 和氏（東京文化財研究所）、熊 博毅氏（学術センター次長）、森本幾子氏（なにわ・大阪文化遺産学研究センター主任研究員）、吉川 潤氏（本館学芸補助）に寄稿いただきました。ご執筆くださいました皆様方に感謝申し上げます。また、下間先生からは、記事に写真を掲載しています「エラム期層出土の彩陶片」をご寄贈いただきました。あわせて厚く御礼申し上げます。

表紙写真は、魚鐸（羽間コレクション 江戸時代後期）です。この魚鐸（鯉の形をした木鐸）は、木槌を伴い、江戸時代の商家で、時を知らせるための道具として使用されていました。やや煤で燻されているところを見ると、台所の近くに吊るされていたものと思われます。